

報道関係各位

(お問い合わせ先)

神奈川歯科大学

社会歯科学講座歯科医療社会学分野

准教授 山本龍生

電話：046-822-8838

Eメール：yama_tatsu@kdcnet.ac.jp

歯を失って義歯を使わなければ 転倒のリスクが2.5倍に

～厚労省研究班が健康な高齢者 1763 名を追跡して明らかに～

歯の状態とその後の転倒とが関連していることが、65歳以上の健常者 1763 名を対象にした3年間の追跡調査で判明しました。郵送調査の3年後に過去1年間に転倒したか否かを再調査しました。その結果、性、年齢、期間中の要介護認定の有無、うつの有無などに関わらず、歯が19本以下で義歯を使用していない人は、転倒のリスクが高くなることが示されました。さらに、歯が19本以下でも義歯を入れることで、転倒のリスクを約半分に抑制できる可能性も示されました。

<背景>

高齢者の約3分の1が1年間に転倒を経験し、転倒した者の約6%が骨折すると言われている。骨折の中でも大腿骨頸部骨折は、高齢者の寝たきり原因となる。また、1度転倒すると、転倒の恐怖から高齢者の引きこもりが起こることも示唆されている。

高齢者の転倒のリスク因子として、リウマチ等の疾患、うつ、脚力やバランス機能の低下などが知られている。しかし、それらのリスク因子への介入が、必ずしも転倒予防には結びついておらず、さらなるリスク因子の特定が望まれている。

一方、臼歯の咬合の喪失が、その後の脚力やバランス機能の低下につながる事が報告されている。歯や咀嚼筋から中枢に向かう神経が、体のバランス機能と関連することが示唆されている。しかし、歯の状態がその後の転倒に影響するのかどうかについては、海外も含め報告がほとんどなく、わかっていなかった。

そこで歯の状態とその後の転倒との関係を明らかにすることを目的として追跡調査を行った。

<方法>

AGES (Aichi Gerontological Evaluation Study, 愛知老年学的評価研究) プロジェクトの一環として、2003年に愛知県に居住する65歳以上の健常者を対象としてアンケート調査を行った。そして、最初の調査時点で過去1年間に転倒の経験がない者のうち、3年間追跡できた1763名の3年後における過去1年間の転倒経験と、歯数および義歯使用の有無との関係を検討した。

<結果>

追跡調査で過去1年間に2回以上の転倒を経験した人は86名(4.9%)であった。転倒経験者の割合は、歯数が少ない人ほど高くなった。

転倒との関連がみられた性、年齢、追跡期間中の要介護認定の有無、うつ、主観的健康観、教育歴を考慮し、リスクの度合いを計算すると、**20歯以上の人に対して19歯以下で義歯未使用の人の転倒リスクは2.50倍**であった(図)。なお、19歯以下で義歯を使用している人の転倒リスクは1.36倍であり、20歯以上の人との間に明らかな(統計学的に有意な)違いは見られなかった。

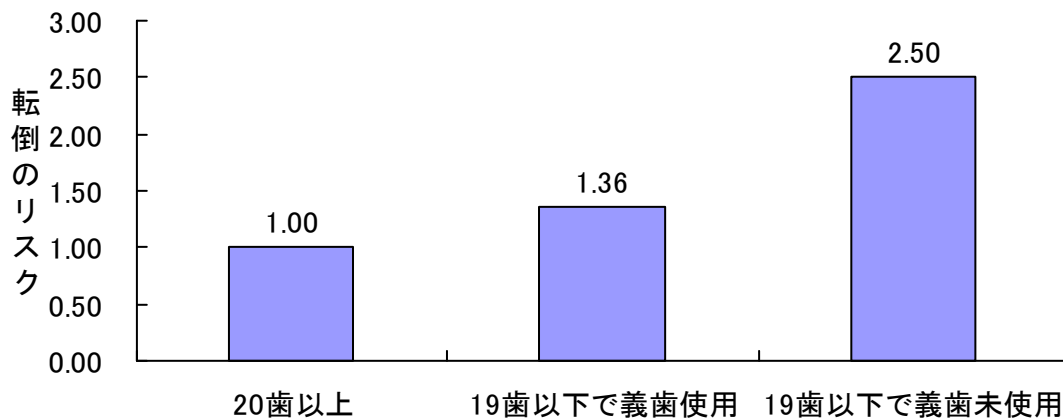


図 歯数・義歯と転倒との関係

(性、年齢、追跡期間中の要介護認定の有無、うつ、主観的健康観、教育歴を調整済み)

<研究の意義>

歯を失っても義歯を使用しないことによって、その後に転倒するリスクが高まることが示された。歯を失っても義歯を使用しなければ、下顎の位置が不安定になり、頭部を含めた体の重心が不安定となり、それらの結果としてバランス低下を招き、転倒する可能性が示唆される。また、歯が少なくても義歯を入れることで転倒リスクを抑制できる可能性も明らかになった。

この研究は、厚生労働科学研究班(主任研究者 近藤克則 日本福祉大学教授)の山本龍生 神奈川歯科大学 准教授が分析し、雑誌BMJ Openに掲載された。厚生労働科学研究(長寿科学総合研究事業)の一つとして行われている「介護保険の総合的政策評価ベンチマークシステムの開発(平成22年~平成24年)」における研究成果である。

論文発表

Yamamoto T, Kondo K, Misawa J, Hirai H, Nakade M, Aida J, Kondo N, Kawachi I, Hirata Y. Dental status and incident falls among older Japanese: a prospective cohort study. BMJ Open 2012;2:e001262 doi:10.1136/bmjopen-2012-001262.